Bulletin of the School of Education,
Nagoya University (Educational Psychology)
1991, Vol. 38, 47 − 65.

看護職キャリア発達（2）

── 看護学校入学後２年間における職業環境認知の変化 ──

若林　満[1)]　水野　智[2)]　佐野幸子[3)]

Ⅰ．問題の所在

１．看護婦教育養成制度の複雑性

わが国の看護婦教育養成の制度は極めて複雑である（若林・水野・佐野，1990，看護行動研究会，1988，1990）。看護婦（いわゆる正看）と准看護婦（いわゆる准看）という看護職の資格そのものが二重構造であることに加え，通常の高校卒業後に入学し，３年間就学したのちに看護婦国家試験の受験資格が得られる３年課程（正規課程）と，准看護婦資格取得後に入学し，２年間就学ののちに看護婦国家試験受験資格が得られる２年課程（進学課程）の別，学校教育法第一条に該当する大学・短大（一条校）と，これに該当しない専修学校・各種学校（非一条校）の別，さらに非一条校には全日制課程と定時制課程（全日制に比べて修業年限が１年延長）の別が交錯することによって，わが国の看護婦教育養成制度を複雑化している（図１参照）。

これらの複雑性のなかでも，上記で３番目にあげた定時制課程の存在は，わが国の看護婦教育を語る上で特に注目すべきものである。先には説明を割愛した准看護婦

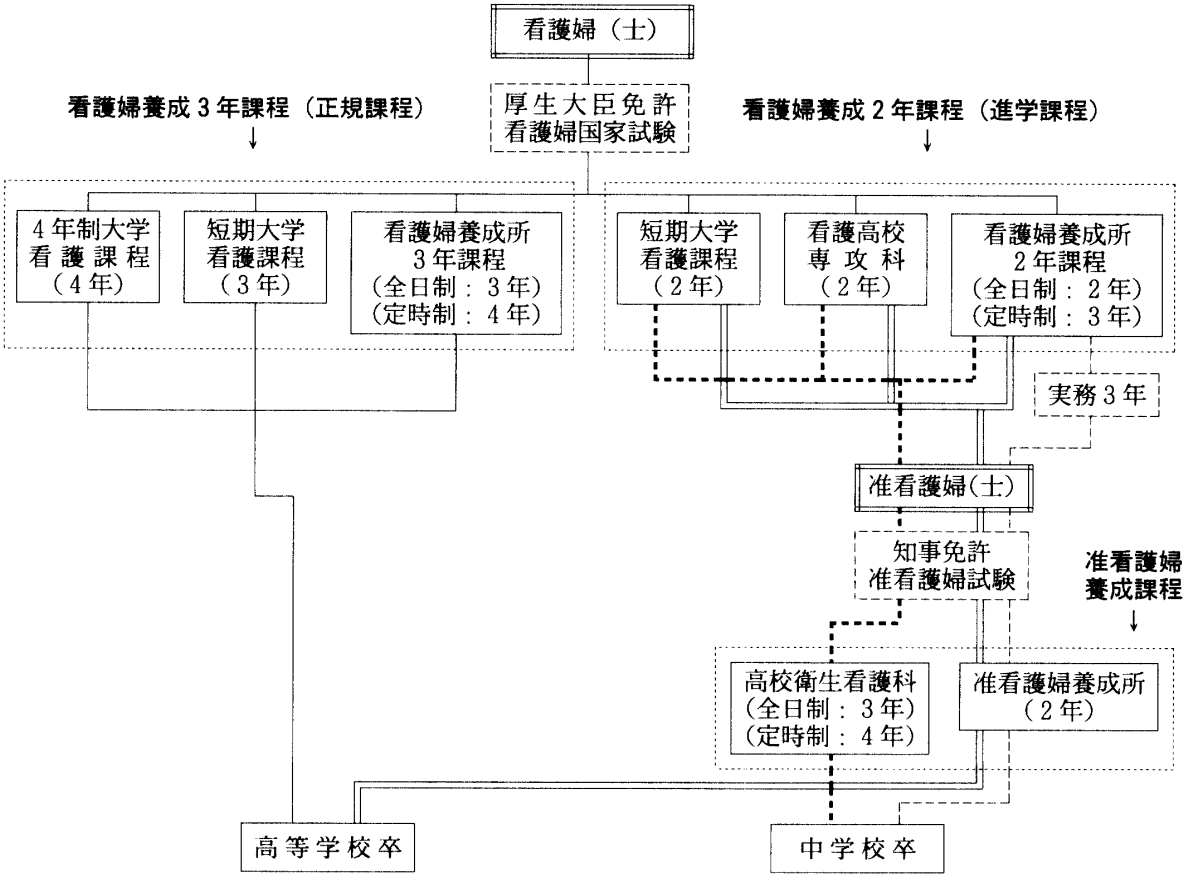

図１　看護教育養成制度

１）現名古屋大学大学院国際開発研究科
２）名古屋大学大学院教育学研究科研究生
３）愛知学院大学

表1　看護婦教育養成課程の種別定員数（1990年入学生）

課程・種別	全日／定時	修業年限	学校数	（%）	1学年定員	（%）
3年課程（正規課程）						
4年制大学	全日制	4年	11	(1.3%)	558	(1.4%)
短期大学	全日制	3年	57	(6.5%)	4140	(10.4%)
専修学校・各種学校	全日制	3年	391	(44.6%)	17640	(44.5%)
専修学校・各種学校	定時制	4年	10	(1.1%)	590	(1.5%)
2年課程（進学課程）						
短期大学	全日制	2年	15	(1.7%)	740	(1.9%)
高校専攻科	全日制	2年	42	(4.8%)	1745	(4.4%)
専修学校・各種学校	全日制	2年	139	(15.9%)	5768	(14.5%)
専修学校・各種学校	定時制	3年	211	(24.1%)	8493	(21.4%)
合	計		876	(100.0%)	39674	(100.0%)

注：本表は看護関係統計資料集（平成2年版）に基づいて作成した。

養成課程の場合，その大部分を占める医師会，医療法人など民間の経営する養成所では，表向きは全日制課程と称するものの，毎日3時間余の授業（おもに午後から夕方までの時間が充てられる）が行なわれるのみで，学生はその前後に，雇用主である医院・病院において看護補助者としてのフルタイムの就労が義務づけられている。また看護婦教育養成の場合，表1に示したように，全体の22.9%の学生，2年課程学生に限ればその50.7%の学生が定時制課程に在籍しており，病院・医院で就業しながら看護学校に通う者たちである。

わが国の看護婦は，上述のような教育養成課程そのものの多様性のみならず，かかる養成課程に入学するために必要とされる基礎学歴も中学卒，高校卒と一様でなく，さらに定時制課程の存在に伴う臨床経験の有無など，「看護婦」資格を取得したその時点で既に多様な経歴を有している。たとえば，高校卒業後すぐに3年課程全日制に入学して看護婦資格を取得した看護婦を，中卒で准看護婦養成課程，看護婦養成2年課程定時制を経て看護婦資格を取得した看護婦と比べた場合，前者は資格取得の時点では臨床での就業経験が皆無であるのに，後者は既に看護補助者として2年間，准看護婦として6年間の計8年間の臨床経験を有していることとなる。従ってこれら看護婦資格取得者のキャリア発達をその教育経歴を考慮せずに比較・検討することは，その研究努力を徒労に終らせてしまう可能性が高い。

2．看護学生の職業観

以前から看護教育の分野においては，看護学生の職業観，看護観といったものに対する関心が高い。そしてそのなかのひとつの流れとして，職業観を職業イメージとして捉え分析する研究がある。これは具体的には「看護」ないしは「看護婦」というキー・コンセプトに対するイメージをSD法（Osgood, Suci, & Tunnenbaum, 1597）などの手法で測定するというものである。たとえば藤原・進藤（1980）は，中学生，高校生，看護学生，一般成人を対象に「看護婦」イメージを25の形容詞対で測定，発達段階別，看護学校での課程別，中学生・高校生での地域別の比較検討を行なっている。また石塚・白佐・木村・水谷（1982）は看護学生（看護短大生，看護専修学校生），養護教諭志望学生（短大保健体育科学生），小学校教諭志望学生（短大初等教育科学生）を対象に18の形容詞対で「看護婦」イメージを測定，看護婦になることを第1志望としている看護学生とそれ以外の看護学生とでの比較，さらに看護学生全般と非看護学生とでの比較を行なった。謝花・平良・安里・金城・新田・上地・砂川・許田・我如古・石川（1984）は看護学校3年課程学生を対象に21形容詞対で「看護婦」イメージを測定し，因子分析により因子レベルでの学年，入学動機，卒後の看護婦就業意思との関連を調べている。さらに国本・尾池・寺尾（1988, 1989, 1990）は看護短大生（3年課程，2年課程），看護専門学校生，そして対照群としての教育大学生を対象に「看護」，「看護婦」など計9種の概念を各20項目の形容詞対で測定した。特に看護短大生については入学時，卒業時の二次にわたった調査が行なわれており，これら時点間での比較を行なっている。

Ⅱ．研究目的

本研究は，わが国の看護婦教育養成制度の有する複雑性・多様性といった特徴を考慮した上で，看護職のキャリア発達を検討することを目的としている。この研究は縦断的な調査研究として計画されており，現時点では看護学生の職業観の形成，変容の過程を明らかにすることが当面の研究目的として捉えられている。

本研究では，看護学生の職業観を理解するために「職業環境認知」という概念を用いている。操作的には，「看護婦」，「医師」，「患者」，「病院」という4種のキー・コンセプトのイメージ測定を行ない，得られた各イメージを統合したものを看護学生の（あるいは看護職の）職業環境認知として捉えている（水野・大西・服部・若林，1988，若林他，1989）。看護学生や看護職にとって「看護婦」のイメージとはまさに自己イメージであり，自己の職業に対するイメージである。一方，「医師」は看護婦にとって最も関連の深い職種であり，ある時には共働者，ある時には指示・命令を下す人，そしてある時には意見対立の最も多い立場の人として存在し，看護職とは対照的に病院組織内で一種の特権層として位置づけられる。「患者」は看護婦にとってまさに日常業務の対象であり，仕事上での喜びの源泉であると同時に，悲しみや苦痛，軋轢の源泉ともなりうる存在である。最後に「病院」は看護職にとって働く空間としての意味を持つと同時に，自分たちの行なう医療・看護という行為の象徴としての意味を有する（若林他，1990，pp. 33-35.）。従ってこの4種の象徴的な概念に対する認知を統合したものは看護職にとっての職業環境に対する認知ということができ，看護学生のこのような認知の構造およびその変容過程を明らかにすることは，彼女たちの職業観発達に対する理解を深める上で極めて重要である。

さまざなな教育養成課程に在籍する看護学生約900名を対象に1988年春より開始された本研究プロジェクトのなかで，特に学生たちの看護学校入学後1年間の職業環境認知の変化を検討した前報告（若林他，1990）では，4種のキー・コンセプトごとに因子分析を行ない，それぞれ2～3の因子を抽出した。そしてこの因子尺度得点に基づいて1年次調査（1年生時の5～6月に実施）から2年次調査（2年生時の4～5月に実施）にかけての年次間変化を検討し，1年次から2年次にかけて全般に看護学生の職業イメージ（職業環境認知）が大きくネガティブな方向に変化していることを見出した。今回の報告では，前報告以降の学生たちの職業イメージがどのような変化を示すか明らかにすること，すなわち看護学校入学後2年間（ことに2年次調査以降）における職業環境認知の変容過程を明らかにすることを研究目的としている。

Ⅲ．研究の方法

1．調査手続きの概要

本調査は，看護職キャリア発達研究プロジェクトとして1988年より開始された縦断調査研究の一環として行なわれたものである。1年次調査，2年次調査，卒業時調査，3年次調査の計4次にわたって実施されており，1年次調査は看護学校入学1年目の5～6月，2年次調査は入学2年目の4～5月，3年次調査は入学3年目の4～6月に，また卒業時調査は修業年限2年の課程の学生（短大2年課程，専門学校2年課程全日制）に対し，卒業直前の2年生冬期（1～2月）に施行されている。

調査に用いた質問紙（看護行動研究会，1988，1990，1991）では，「看護婦」，「医師」，「患者」，「病院」の4種のキー・コンセプトについて「次の各特徴はあなたの『○○○』イメージにどの程度当てはまりますか。」（『○○○』には「看護婦」，「医師」，「患者」，「病院」の各語が入る）という問いとともに，13～20の形容詞（水野他，1988）を提示し，各々について「まったく当てはまらない（1点）」から「非常に当てはまる（5点）」までの5点尺度によって評定を求めた。

なお，質問紙は上記の質問項目の外に進路選択，職業観，学校生活に対する態度，さらに定時制課程学生については就業実態や就業意識に関する質問を含んだ，B5版12ページから成る冊子の形をとっている。

2．調査対象・実施方法

調査対象は，わが国の看護婦教育養成課程の複雑性（図1，表1参照）を考慮し8種類の課程に分類，このうち調査協力の得られなかった高等学校衛生看護科専攻科を除く7つの課程に1988年4月に入学した看護学生を用いた。表2に調査対象校の概要と調査票回収数を示す。1年次調査は98.7%，2年次調査は99.4%，卒業時調査は98.0%，3年次調査は99.3%のように，極めて高い回収率を得ることができた。なお，本稿では，分析を行なう調査項目にすべての年次の調査で欠測，不備のない被験者のデータのみを用いているため，有効サンプル数は814名（対1年次調査対象者比＝91.1%）となった。

調査は集団法により，調査員が各対象校に出向し，講義時間の一部，または講義終了後の時間を利用して実施した。当日欠席したため，あるいは留年などによってその場に参加できなかった学生に対しては，各校の教員等を通じて質問紙および返信用封筒を手渡し，後日郵送によって回収した。

表2　調査実施概要

学校	課程	所在地	1年次調査（1988年）			2年次調査（1989年）			卒業時調査（1990年）			3年次調査（1990年）		
			対象数	回収数（%）	実施日	対象数[1]	回収数（%）	実施日	対象数	回収数[2]（%）	実施日	対象数	回収数（%）	実施日
1. A大学	4年制大学	関東	56	56（100.0）	6／16	56	56（100.0）	5／9	…	…	…	56	52（92.9）	5／10
2. B大学	〃	〃	110	103（93.6）	6／21	109	104（95.4）	5／10	…	…	…	108	108（100.0）	5／18
3. C短大	短大3年課程	東海	80	80（100.0）	6／1	79	79（100.0）	5／17	…	…	…	78	78（100.0）	6／5
4. D短大	〃	北陸	52	52（100.0）	6／14	52	52（100.0）	5／11	…	…	…	52	52（100.0）	4／28
5. E短大	短大2年課程	東海	30	28（93.3）	6／22	30	30（100.0）	5／25	30	30（100.0）	1／22	…	…	…
6. F短大	〃	北陸	40	40（100.0）	6／14	40	40（100.0）	5／11	36	35（97.2）	2／29	…	…	…
7. G看専	専：3年全日	東海	40	40（100.0）	5／28	38	38（100.0）	5／8	…	…	…	36	36（100.0）	4／26
8. H看専	〃	〃	75	74（98.7）	6／28	71	71（100.0）	4/25-26	…	…	…	68	68（100.0）	5／17
9. I看専	〃	〃	42	42（100.0）	6／8	42	42（100.0）	4／24	…	…	…	40	39（97.5）	4／27
10. J看専	専：3年定時	〃	158	157（99.4）	5／26	151	149（98.7）	4／26	…	…	…	144	144（100.0）	5／26
11. K看専	専：2年全日	〃	38	37（97.4）	5／26	38	38（100.0）	5／1	38	38（100.0）	2／29	…	…	…
12. L看専	〃	〃	47	47（100.0）	5／26	47	47（100.0）	4／27	46	44（95.7）	2／30	…	…	…
13. M看専	専：2年定時	〃	40	40（100.0）	6／1	40	40（100.0）	4／28	…	…	…	40	40（100.0）	5／2
14. N看専	〃	〃	45	45（100.0）	6／4	44	44（100.0）	4／25	…	…	…	44	44（100.0）	5／1
15. O看専	〃	〃	41	41（100.0）	6／8	41	41（100.0）	4／24	…	…	…	40	40（100.0）	4／27
計			894	882（98.7）		878	871（99.4）		150	147（98.0）		706	701（99.3）	

1）2年次および3年次の調査対象者数は，1年次調査対象者数から中途退学者を減じた数でである。
2）卒業時調査の対象者数は，1年次調査対象者数から中途退学者，および留年・休学中の学生を減じた数である。

表3　看護婦のイメージ：因子分析結果

	1年次調査（N＝814）				2年次調査（N＝814）				卒業時・3年次調査（N＝814）			
	1	2	3	h^2	1	2	3	h^2	1	2	3	h^2
有能性と健康性												
1　頭が良い	.396	.040	.301	.249	.385	.093	.374	.297	**.415**	−.016	.338	.287
3　身体の丈夫な	**.640**	.082	.057	.420	**.662**	.088	.053	.449	**.628**	.009	.061	.398
5　判断力のある	**.594**	−.041	.108	.366	**.655**	−.097	.203	.480	**.649**	−.120	.149	.458
6　笑顔の	**.515**	−.184	.293	.385	**.474**	−.246	**.405**	.449	**.489**	−.311	.357	.464
9　気がきく	**.572**	−.083	.245	.394	**.515**	−.115	.292	.364	**.548**	−.099	.275	.386
13　知識の豊富な	**.579**	−.063	.259	.407	**.562**	−.065	.294	.406	**.635**	−.061	.172	.437
15　健康的な	**.657**	.046	.129	.450	**.629**	−.044	.168	.425	**.626**	−.072	.206	.439
17　責任感のある	**.661**	−.020	.175	.468	**.698**	−.068	.160	.517	**.697**	−.116	.136	.518
19　体力のある	**.714**	.187	.006	.545	**.703**	.196	.030	.533	**.644**	.152	.016	.438
陰　険　性												
4　恐ろしい	−.155	**.544**	.058	.324	−.069	**.672**	−.040	.458	−.193	**.679**	.076	.504
7　多忙な	.207	**.402**	−.003	.205	.312	.378	−.076	.246	.328	.393	−.111	.275
8　気が強い	.030	**.570**	.030	.326	.073	**.599**	.011	.364	−.004	**.585**	.014	.343
11　大変な	.302	**.497**	−.007	.339	.379	**.425**	−.061	.328	**.404**	**.433**	−.109	.363
12　きつい	.141	**.565**	−.060	.343	.109	**.597**	−.081	.375	.135	**.583**	−.104	.369
16　意地悪な	−.355	**.652**	.004	.552	−.281	**.750**	.049	.644	−.246	**.695**	.042	.545
20　冷たい	−.357	**.658**	−.004	.560	−.273	**.731**	−.021	.610	−.235	**.690**	.065	.535
『天使』性												
2　かわいい	.038	.113	**.637**	.420	.048	.045	**.591**	.354	.062	.084	**.683**	.477
10　天使のような	.328	−.127	**.588**	.469	.225	−.179	**.644**	.498	.222	−.091	**.640**	.468
14　美しい	.131	.044	**.768**	.609	.085	.024	**.766**	.595	.076	.085	**.760**	.591
18　素敵な	.363	−.044	**.599**	.493	.361	−.102	**.533**	.425	.334	−.095	**.590**	.468
Σa^2	3.917	2.333	2.074	8.324	3.805	2.780	2.231	8.816	3.835	2.643	2.283	8.761
%	47.1	28.0	24.9	100.0	43.2	31.5	25.3	100.0	43.8	30.2	26.1	100.0

表4　医師のイメージ：因子分析結果

	1年次調査（N＝814）				2年次調査（N＝814）				卒業時・3年次調査（N＝814）			
	1	2	3	h^2	1	2	3	h^2	1	2	3	h^2
有　能　性												
1　大変な	**.457**	−.043	.154	.235	**.475**	.045	.228	.279	**.489**	−.040	.173	.271
4　判断力がある	**.528**	−.102	.183	.323	**.531**	−.048	.265	.355	**.636**	−.161	.134	.449
7　偉大な	**.776**	−.053	.119	.618	**.741**	−.083	.119	.570	**.707**	−.049	.263	.572
10　冷静な	**.476**	.052	.129	.245	**.419**	.106	.203	.228	**.512**	.068	.147	.289
12　立派な	**.795**	−.119	.114	.659	**.824**	−.016	.136	.698	**.757**	−.015	.244	.633
非 親 和 性												
2　冷たい	−.137	**.651**	−.252	.506	−.067	**.686**	−.190	.512	−.126	**.607**	−.142	.405
5　気難しい	.062	**.673**	−.213	.502	.155	**.654**	−.057	.454	.106	**.713**	−.056	.522
8　変っている	−.138	**.594**	.027	.373	−.069	**.526**	−.005	.281	−.111	**.550**	−.002	.315
11　近寄りにくい	.101	**.624**	−.257	.465	.147	**.628**	−.154	.440	.131	**.596**	−.128	.388
13　暗　い	−.106	**.602**	−.098	.383	−.126	**.642**	−.081	.434	−.150	**.620**	−.086	.414
配　慮　性												
3　やさしい	.270	−.218	**.668**	.566	.300	−.179	**.678**	.582	.271	−.138	**.585**	.434
6　親切な	.262	−.209	**.741**	.662	.296	−.176	**.713**	.627	.313	−.136	**.708**	.618
9　思いやりのある	.314	−.269	**.729**	.702	.283	−.165	**.756**	.680	.325	−.136	**.791**	.749
Σa^2	2.252	2.177	1.814	6.243	2.240	2.094	1.806	6.140	2.335	2.009	1.714	6.058
%	36.1	34.9	29.1	100.0	36.5	34.1	29.4	100.0	38.5	33.2	28.3	100.0

表5　患者のイメージ：因子分析結果

	1年次調査（N＝814）				2年次調査（N＝814）				卒業時・3年次調査（N＝814）			
	1	2	3	h^2	1	2	3	h^2	1	2	3	h^2
心身の弱さ												
1　身体の弱い	**.575**	.134	.042	.350	**.615**	.042	−.007	.380	**.617**	.053	.009	.384
2　心細い	**.584**	.067	.164	.372	**.572**	−.001	.222	.377	**.598**	.016	.154	.382
5　顔色が悪い	**.639**	.126	.050	.427	**.623**	.067	.060	.397	**.638**	.126	−.004	.423
6　苦しい	**.663**	.073	.157	.469	**.635**	.068	.205	.450	**.646**	.055	.102	.430
9　元気のない	**.725**	.142	−.110	.558	**.673**	.106	.011	.465	**.640**	.183	−.015	.443
10　不安な	**.647**	.031	.083	.426	**.568**	−.038	.242	.382	**.594**	−.001	.183	.386
13　気の毒な	**.487**	.195	.234	.329	**.533**	.195	.084	.329	**.466**	.169	.195	.283
14　さみしそうな	**.626**	.201	.237	.489	**.576**	.114	.220	.392	**.609**	.124	.202	.427
16　哀れな	**.478**	.284	.075	.315	**.493**	.297	−.063	.335	**.405**	.384	.099	.321
17　弱　い	**.704**	.191	−.028	.533	**.591**	.174	−.117	.393	**.646**	.234	.021	.465
自己中心性												
3　わがままな	.115	**.695**	−.082	.502	.061	**.693**	−.127	.500	.062	**.682**	−.115	.482
7　不潔な	.145	**.431**	−.027	.208	.199	**.444**	−.081	.243	.204	**.460**	−.013	.253
11　頑固な	.191	**.690**	−.023	.513	.096	**.709**	**.016**	**.512**	**.113**	**.737**	.040	.557
15　自己中心的な	.108	**.794**	−.023	.642	.033	**.796**	−.069	.640	.052	**.789**	−.029	.625
18　気難しい	.139	**.749**	.004	.580	.117	**.691**	.029	.491	.108	**.778**	.026	.617
しんの強さ												
4　努力している	.143	−.031	**.550**	.324	.165	−.076	**.588**	.378	.125	−.039	**.654**	.445
8　やさしい	.014	−.046	**.482**	.235	.032	−.085	**.515**	.273	.125	.012	**.536**	.304
12　忍耐力のある	.129	−.040	**.640**	.428	.101	−.001	**.643**	.424	.080	−.041	**.701**	.500
Σa^2	3.956	2.600	1.145	7.701	3.587	2.497	1.280	7.364	3.595	2.751	1.381	7.727
%	51.4	33.8	14.9	100.0	48.7	33.9	17.4	100.0	46.5	35.6	17.9	100.0

Ⅳ. 結　果

1．職業環境イメージの因子分析

まず，「看護婦」，「医師」，「患者」，「病院」の各キー・コンセプトについて因子分析を行なった。すでに1年次，2年次の調査データについて行なった因子分析から年次間で安定した因子構造を得ているが（若林他，1990），今回の分析は，卒業時・3年次調査データにおいてもこれと同様の構造が得られるか否かを検討するもの，換言すれば因子構造の年次間での安定性の確認を目的としている。なおここで使用した因子分析の手法は，共通性の初期値にSMCを用い，主因子解を求めた後にバリマックス回転を施すものである。

1）　看護婦イメージ

表3は，看護婦イメージ測定のための形容詞20項目に対する反応に因子分析を施したものである。1年次，2年次，卒業時・3年次のいずれの因子分析結果も，安定した3因子構造を示していることがわかる。これらの因子の意味内容については，これまでの一連の因子分析結果（若林他，1989，1990）と同様，第1因子は看護婦の有能性と健康性を示す「有能性と健康性の因子」，第2因子は看護婦イメージ項目のうちのネガティブな意味内容のものに負荷が高く，陰険で怖いという看護婦像を示す「陰険性の因子」，第3因子は憧憬の対象としての看護婦像を示す「『天使』性の因子」と解釈された。

2）医師のイメージ

表4は，医師イメージ測定の13項目に対する因子分析結果を示したものである。ここでも年次間で安定した因子構造が得られており，第1因子は医師の偉大性や有能性を意味する「有能性の因子」，第2因子は医師イメージ項目のネガティブな意味内容のものに負荷が高く，冷たく近寄り難い医師像を意味する「非親和性の因子」，第3因子はやさしく親切で思いやりのある医師像を示す「配慮性の因子」と解釈された。

3）患者のイメージ

表5は，患者イメージ18項目の因子分析結果を示したものである。第1因子は患者の外見的，内面的，身体的な弱々しさを意味する「心身の弱さの因子」，第2因子は他者への気遣いを欠く，自己中心的な患者の性格特徴を示す「自己中心性の因子」，第3因子は病気に負けないひたむきで健気な患者の闘病態度を反映する因子で「しんの強さの因子」と解釈された。これらの因子も，年次間で安定した構造を示していた。

4）病院のイメージ

表6は，病院イメージ測定のための形容詞14項目に対する因子分析結果を示したものである。第1因子は病院に対する回避的態度を示す項目と，陰欝な病院イメージを示す項目に負荷が高く，「忌避性と陰欝さの因子」とした。なおこの因子は予備調査（若林他,1989）の際に得られた陰欝さの因子と忌避性の因子の両者が合併したものである。第3因子は医療提供の場としての病院への信頼性を示す因子であり，「信頼性の因子」と解釈された。なお，この病院イメージ各因子も年次間では極めて高い因子構造の安定性を示していた。

2．因子尺度得点による看護学生の職業環境認知の検討

上記のようにして各キー・コンセプトから得られた因子について，それぞれの因子に負荷の高い項目の粗点を合計（ないしは平均）することによって因子尺度得点を算出し，この得点に基づいて，課程間比較，年次間比較を行なった。なお巻末の補表1には，全因子尺度得点の相互相関係数とともに，各因子尺度得点の信頼性係数（α係数）をその対角要素に示している。

1）因子尺度得点の課程間比較

まず，算出された因子尺度得点に基づいて，各年次別に課程間での比較を試みた。表7～10は，キー・コンセプトごとに各因子尺度得点の課程別平均値を示すとともに，一元配置分散分析による課程間での平均値の有意差検定の結果を提示している。

（a）看護婦のイメージ

表7に示した看護婦イメージに関する結果によれば，第1因子「有能性と健康性」，第2因子「陰険性」のいずれにおいても課程間の差は明確でなく，「有能性と健康性」因子で1年次において5％水準の課程間差が，また「陰険性」因子において卒業時・3年次に5％水準の課程間差が得られた程度であった。しかし第3因子「『天使』性」では，1年次には有意差は得られなかったものの，2年次では1％水準，卒業時・3年次では0.1％水準の有意な課程間差が得られており，この因子に関しては，年次を経るに従って課程間の差が顕著になる傾向があった。

また，課程ごとに年次を通じての因子尺度得点パターンの一貫性を検討した結果，第1因子「有能性と健康性」においては，専：3年課程全日制がすべての年次を通じて高い得点を示しており，第2因子「陰険性」では専：2年課程定時制がほぼ一貫して低い得点を示し，また第3因子「『天使』性」では短大2年課程が一貫して高い

表6　病院のイメージ：因子分析結果

	1年次調査（N＝814）			2年次調査（N＝814）			卒業時・3年次調査（N＝814）		
	1	2	h^2	1	2	h^2	1	2	h^2
忌避性と陰鬱さ									
2　冷たい	.592	−.036	.352	.628	.008	.394	.631	.029	.399
3　痛い	.552	.134	.323	.538	.064	.293	.529	.147	.301
5　暗い	.644	−.156	.440	.697	−.206	.528	.664	−.166	.469
6　行きたくない	.613	−.024	.376	.660	−.075	.442	.656	−.004	.430
8　孤独な	.672	−.075	.457	.708	−.002	.501	.712	−.038	.509
9　近寄り難い	.770	−.082	.599	.700	−.007	.490	.733	.005	.538
11　さみしい	.673	−.017	.453	.716	−.022	.513	.720	−.005	.518
12　嫌　な	.740	−.067	.553	.704	−.086	.503	.758	−.013	.575
14　陰気な	.746	−.211	.602	.730	−.232	.587	.749	−.181	.594
信　頼　性									
1　清潔な	−.174	.725	.556	−.132	.744	.571	−.111	.742	.563
4　広　い	.095	.513	.272	.155	.536	.312	.082	.572	.334
7　信頼できる	−.106	.601	.373	−.120	.477	.242	−.014	.485	.235
10　きれいな	−.201	.757	.613	−.162	.775	.626	−.095	.787	.628
13　設備の整った	.052	.710	.507	.011	.685	.470	.016	.624	.390
Σa^2	4.142	2.332	6.474	4.220	2.252	6.472	4.277	2.207	6.484
%	64.0	36.0	100.0	65.2	34.8	100.0	66.0	34.0	100.0

得点を，短大3年課程が一貫して低い得点を示す傾向があった。その他，第2因子「陰険性」において専：3年課程全日制の得点が，1年次は7課程のうち中程度の位置にあるものの，2年次以降の得点はいずれも7課程のうち最も高い得点を示していることも注目された。

以上，「看護婦」イメージの因子尺度得点の課程間比較においては，3因子いずれも課程間での相違はあまり顕著ではなく，第3因子「『天使』性」のみが年次を経るにつれて徐々に課程間差を高めていく傾向を示していた程度であった。また，特定の課程に特異な得点パターンの認められる因子もあったが，3因子を通じて一貫した傾向を認めることはできなかった。

（b）医師のイメージ

表8は医師のイメージに関する平均値の課程間比較の結果を示している。第1因子「有能性」では，1年次には有意な課程間差はなく，2年次に5％水準，卒業時・3年次に0.1％水準の有意差が得られ，年次を経るにつれて課程間での相違を強めていく傾向が読み取れた。第2因子である「非親和性」に関しては，すべての年次を通じて高い（0.1％水準）課程間有意差が存在しており，各年次のF値はほぼ一定していることから，課程間較差が年次によって変化するものではないことが明らかであった。第3因子「配慮性」では1年次のみ1％水準の課程間差が得られ，2年次以降の課程間差は有意ではなかった。ただしこの因子における年次間でのF値の変化はあまり明確なものではなっかた。

これらの因子尺度得点パターンの年次を通じての一貫性を検討した結果，第1因子「有能性」では短大3年課程が一貫して高い得点を，専：2年課程定時制が一貫して低い得点を示していた。第2因子「非親和性」では短大2年課程が高い得点を，短大3年課程が低い得点を，それぞれ一貫して示していた。第3因子「配慮性」においては，特定の課程に年次を通じての一貫した得点パターンを認めることはできなかった。

以上，「医師」イメージ因子尺度得点における課程間比較の結果，第1因子「有能性」において，年次を経るにつれて課程間較差が強まる傾向が読み取れた。第2因子「非親和性」ではいずれの年次においても強い課程間較差が認められ，第3因子「配慮性」ではいずれの年次でも課程間の差はわずかであった。また，短大3年課程

表7　看護婦のイメージ因子尺度得点の年次別平均値と年次間変化

	①有能性と健康性					②陰険性					③『天使』性				
	1年	増減[1]	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2
4年制大学	4.15	↘	4.08	↘	4.06	1.493	3.10	↗***	3.27	↗	3.31	17.44***	2.70	↘*	2.58	↘*	2.47	9.87**
短大3年課程	4.02	↘	4.04	↗	4.07	3.608	3.08	↗***	3.28	↗	3.34	22.52***	2.56	↘	2.49	↘	2.49	0.49
短大2年課程	4.09	↘	4.03	↘	4.02	5.331	3.29	↗	3.31	↘*	3.16	4.77	2.87	↘	2.83	↘	2.77	0.49
専：3年全日	4.18	↘	4.15	↘*	4.07	5.665	3.08	↗***	3.38	↗	3.47	29.16***	2.82	↘	2.76	↘	2.68	7.46*
専：3年定時	4.26	↘*	4.17	↘	4.09	13.394**	3.13	↗	3.21	↗	3.28	5.59	2.69	↘	2.59	↘	2.58	3.61
専：2年全日	4.21	↘	4.08	↘*	3.96	11.306**	3.08	↗**	3.30	↘	3.27	5.11	2.78	↘	2.77	↗	2.78	0.47
専：2年定時	4.12	↘	4.09	↗	4.09	0.530	3.00	↗***	3.17	↗	3.26	17.62***	2.69	↗	2.78	↘	2.77	1.29
全体	4.15	↘**	4.10	↘*	4.06	15.168***	3.09	↗***	3.27	↗*	3.32	74.68***	2.72	↘*	2.67	↘	2.62	9.75***
分散分析[2]	2.47*		0.91		0.67		1.66		1.46		2.76*		1.72		3.54**		3.91***	
共分散分析[3]			0.37		0.96				1.99		2.56*				2.60*		1.53	

表8　医師のイメージ因子尺度得点の年次別平均値と年次間変化

	①有能性					②非親和性					③配慮性				
	1年	増減[1]	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2
4年制大学	3.97	↘***	3.78	↗**	3.63	36.72***	2.80	↘	2.72	↗	2.82	2.04	3.20	↘	3.16	↘***	2.96	16.92***
短大3年課程	4.00	↘	3.94	↗	4.00	0.59	2.54	↗***	2.81	↘	2.73	16.79***	3.17	↘*	3.03	↗*	3.14	4.21
短大2年課程	3.96	↘***	3.73	↘	3.69	19.22***	3.11	↗*	3.29	↘	3.18	4.16	2.98	↘	2.91	↗	3.03	0.83
専：3年全日	3.99	↘	3.93	↘**	3.80	13.86***	2.81	↗	2.89	↗	2.91	3.48	2.95	↗	3.04	↘	3.00	2.38
専：3年定時	4.02	↘**	3.88	↘***	3.67	21.23***	2.81	↗**	3.01	↗	3.11	15.11***	3.22	↘	3.10	↘*	2.93	20.87***
専：2年全日	3.91	↘	3.88	↘***	3.64	16.37***	2.85	↗***	3.10	↘*	2.99	11.52**	3.05	↘	3.01	↘	2.97	1.48
専：2年定時	3.85	↘**	3.70	↘	3.61	15.50***	3.06	↗	3.01	↗	3.04	1.04	3.01	↘	2.98	↘	2.91	0.63
全体	3.97	↘***	3.84	↘***	3.73	96.09***	2.83	↗***	2.94	↗	2.95	19.55***	3.10	↘	3.05	↘*	2.99	15.75***
分散分析[2]	0.97		2.59*		5.51***		7.20***		7.23***		6.52***		2.97**		1.38		1.93	
共分散分析[3]			2.38*		4.83***				5.84***		3.16***				0.96		3.54***	

1）↗＝前年次に比べて得点の上昇（「当てはまる」方向への変化）を，↘＝前年次に比べて得点の低下（「当てはまらない」方向への変化）を意味する。有意差検定は，対応する測度の場合のt検定による。

2）一元分散分析によるF値を示す。

3）全年次の得点を共変量とした共分散分析によるF値を示す。

上記のいずれの検定も，*** $p<.001$，** $p<.01$，* $p<.05$。

表9　患者のイメージ因子尺度得点の年次別平均値と年次間変化

	①心身の弱さ						②自己中心性						③しんの強さ					
	1年	増減[1]	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2
4年制大学	3.66	↘***	3.49	↗***	3.60	13.36**	2.83	↘	2.75	↘	2.74	1.52	2.98	↗	3.04	↗***	3.24	17.12***
短大3年課程	3.55	↗	3.55	↘	3.47	4.42	2.93	↘*	2.80	↘	2.77	5.98	2.76	↗***	3.14	↗**	3.28	57.47***
短大2年課程	3.65	↘	3.56	↘*	3.38	12.36**	3.17	↘	3.04	↘**	2.81	18.68***	2.91	↗	2.94	↗	3.04	3.32
専：3年全日	3.76	↘	3.73	↘***	3.56	28.79***	3.00	↗	3.04	↘*	2.94	2.43	2.95	↗	2.99	↗	3.10	7.17*
専：3年定時	3.36	↗	3.36	↘	3.35	0.14	2.81	↗***	3.11	↘	3.08	22.61***	3.04	↘	2.99	↘	2.92	2.40
専：2年全日	3.59	↘	3.54	↘	3.49	2.49	2.96	↗	2.98	↘	2.94	0.10	3.13	↘	3.02	↗	3.11	2.33
専：2年定時	3.55	↘*	3.44	↗**	3.55	10.99**	3.33	↗	3.35	↘	3.35	1.71	2.82	↗	2.84	↗	2.87	1.30
全　体	3.58	↘***	3.52	↘	3.50	20.20***	2.98	↗	3.00	↘**	2.95	2.04	2.94	↗**	3.00	↗***	3.09	34.80***
分散分析[2]	6.68***		6.84***		3.83***		9.62***		15.17***		14.98***		5.37***		3.15**		8.21***	
共分散分析[3]			3.50**		6.06***				12.22***		4.95***				5.20***		6.02***	

表10　病院のイメージ因子尺度得点の年次別平均値と年次間変化

	①忌避性と陰欝さ						②信頼性					
	1年	増減[1]	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2	1年	増減	2年	増減	卒•3年	Friedman χ^2
4年制大学	2.75	↗	2.80	↗*	2.91	7.77*	3.77	↘***	3.45	↘	3.37	35.02***
短大3年課程	2.70	↗**	2.89	↗	2.89	10.40**	3.57	↘***	3.32	↗	3.33	16.63***
短大2年課程	2.92	↗	3.06	↘*	2.93	1.58	3.44	↘**	3.20	↗	3.27	8.33*
専：3年全日	2.86	↗	2.97	↘*	2.83	1.96	3.70	↘***	3.36	↘	3.31	34.46***
専：3年定時	2.58	↗	2.61	↗	2.62	1.21	3.76	↘***	3.49	↘**	3.32	32.45***
専：2年全日	2.93	↗	2.97	↘*	2.85	2.61	3.46	↘	3.39	↘	3.36	4.43
専：2年定時	2.77	↘	2.76	↗	2.82	1.09	3.44	↘	3.34	↘	3.29	7.66*
全　体	2.77	↗**	2.84	↘	2.83	6.00*	3.62	↘***	3.38	↘**	3.32	129.32***
分散分析[2]	3.33**		5.25***		2.74*		5.37***		2.15*		0.29	
共分散分析[3]			3.13**		1.98				1.32		0.58	

1）↗＝前年次に比べて得点の上昇（「当てはまる」方向への変化）を，↘＝前年次に比べて得点の低下（「当てはまらない」方向への変化）を意味する。有意差検定は，対応する測度の場合のt検定による。

2）一元分散分析によるF値を示す。

3）全年次の得点を共変量とした共分散分析によるF値を示す。

上記のいずれの検定も，*** $p<.001$，** $p<.01$，* $p<.05$。

が年次を通じて，第1因子「有能性」では高得点を，第2因子「非親和性」では低得点を示しており，この課程の学生が「医師」に対して相対的にポジティブなイメージを有していることが示唆された。さらに，専：2年課程定時制が第1因子「有能性」では一貫して低い得点を示し，また第2因子「非親和性」ではやや高い得点を，第3因子「配慮性」ではやや低い得点を示す傾向があることから，この課程の学生が有する「医師」イメージがあまりポジティブなものではないことが示唆された。

（c）患者のイメージ

表9は患者イメージに関する課程別平均値などの結果を示している。得られた3因子のすべてにおいて顕著な課程間差が得られており，第3因子「しんの強さ」の2年次調査データで課程間差が1％水準であった以外，すべての因子尺度，すべての年次で0.1％水準の有意差が得られていた。また，年次間での課程間差の程度（F値）を比較すると，第1因子「心身の弱さ」では1年次・2年次に比べ卒業時・3年次のF値が小さいこと，第2因子「自己中心性」では1年次に比べ2年次および卒業時・3年次のF値が大きいこと，また第3因子「しんの強さ」では2年次のF値が最も小さく，卒業時・3年次のF値が最も大きいことなどがわかるが，これらはいずれもあまり顕著なものではなかった。

これら因子尺度得点において，年次を通じて一貫性をもつ課程の存在をみると，第1因子「心身の弱さ」では，専：3年課程定時制の得点が一貫して低く，専：3年課程全日制の得点が高い傾向が認められた。第2因子「自己中心性」においては，4年制大学と短大3年課程の得点が年次を通じて低く，また専：2年課程定時制の得点は年次を通じて高い傾向があった。第3因子「しんの強さ」では専：2年課程定時制の得点が一貫して低い傾向があったが，むしろ短大3年課程のように，1年次の得点は7課程間で最も低いものの，2年次，卒業時・3年次には逆に7課程のなかで最も高い得点を示しており，この課程の示す変化の特異性が注目された。

以上，「患者」イメージの因子尺度得点における課程間較差を検討した結果，全因子，全年次を通じて課程間の差が顕著であること，この較差の年次間での変動はあまり顕著でないことがわかった。また，年次を通じて特異な得点パターンを示す課程の存在を検討した結果，専：2年課程定時制が第2因子「自己中心性」で高得点を，第3因子「しんの強さ」で低得点を示していることから，この課程学生が他の課程に比べて「患者」イメージをネガティブに感じていることが示唆された。

（d）病院のイメージ

病院のイメージに関する因子尺度得点の課程別平均値などは表10に示した。第1因子「忌避性と陰欝さ」では1年次は1％水準，2年次は0.1％水準，卒業時・3年次では5％水準の課程間有意差が得られていた。ただしこの年次間でのF値の変化はあまり顕著なものではなかった。また第2因子「信頼性」では，1年次は0.1％水準であるが，2年次には5％水準，卒業時・3年次には有意差なしのように，時間経過につれて課程間の差が収束していく傾向があった。全般にこの因子における課程間較差は「患者」イメージなどと比べてもあまり顕著なものではなかった。

これら各年次の因子尺度得点に特異なパターンを示す課程の存在を確認したところ，第1因子「忌避性と陰欝さ」では専：3年課程定時制の得点が一貫して低く，短大2年課程の得点が高い傾向があった。第2因子「信頼性」では短大2年課程の得点が一貫して低く，4年制大学の得点が高い傾向があった。

以上，「病院」イメージの因子尺度得点の課程間比較の結果から，このイメージ因子における課程間較差はあまり強いものではないが，第2因子「信頼性」においては較差が年次を経るにつれて収束していく傾向が読み取れた。また短大2年課程の学生が，「病院」に対して一貫してネガティブなイメージを有していることも示唆された。

2）因子尺度得点の年次間比較

次に，算出されている因子尺度得点の年次間での比較を行なった。表7～10において，平均得点の増減を「↗」（増加：「当てはまる」方向への変化），「↘」（減少：「当てはまらない」方向への変化）で示し，その変化を検定した結果（対応のある測度の場合のt検定）も併せて記載している。さらに3つの年次間での代表値の差の検定も，Fiedmanのχ^2に基づいて行なっている。そして，年次間における変化の程度の課程間での相違を検討するため，前年次の因子尺度得点を共変量とした共分散分析を行ない，得られたF値と有意水準も提示している。

（a）看護婦のイメージ

看護婦イメージの因子尺度得点の年次間比較の結果は表7に示している。第1因子「有能性と健康性」においては，1年次から2年次にかけて全体で有意水準1％の低下を，2年次から卒業時・3年次にかけては5％水準の低下を示していた。第2因子「陰険性」では，全体における変化は1年次から2年次にかけて0.1％水準の増加傾向，2年次から卒業時・3年次にかけても5％水準の増加傾向を示していたが，特に1年次から2年次にかけての変化の程度が強く，4課程のうち3課程で0.1％水準，1課程で1％水準の有意な変化を示していた。第

3因子「『天使』性」の場合，年次を経るにつれて得点の低下傾向を示しているが，その程度は弱く，1年次から2年次にかけて全体で5％水準の有意差が得られた程度であった。

年次間での変化における課程間差を検討したところ，第2因子「陰険性」の2年次から卒業次・3年次にかけて5％水準，第3因子「『天使』性」の1年次から2年次にかけて5％水準の有意差が得られた。

以上の結果から，看護婦イメージ因子においては，第1因子「有能性と健康性」，第3因子「『天使』性」といった，看護婦イメージのポジティブな側面を示す因子では，年次を経るに従って得点の低下，すなわちポジティブなイメージが弱まっていく傾向が読み取れる。一方，第2因子「陰険性」のようにネガティブな側面を示す因子では，年次を経るに従って得点が増加していく傾向，すなわちネガティブなイメージがさらに強まっていく傾向が示されている。そしてこの傾向は，1年次から2年次にかけての変化が顕著で，2年次以降の変化はそれまでの変化と同方向ではあるが，若干の鈍化傾向を示しているものといえる。また年次間変化の程度における課程間の差に若干有意なものもあったが，顕著なものではなかった。

（b）医師のイメージ

表8では，医師イメージの因子尺度得点の年次間比較を示している。まず第1因子「有能性」の場合，全体での年次間変化は，1年次から2年次にかけて0.1％水準，2年次から卒業時・3年次にかけても0.1％水準の得点の有意な低下を示している。第2因子「非親和性」では，1年次から2年次にかけては0.1％水準の有意な増加を示しており，2年次から卒業時・3年次にかけては全体での得点は増加しているものの有意な変化ではなかった。第3因子「配慮性」の場合も，年次を経るにつれて得点は減少しているが，2年次から卒業時・3年次にかけての変化がわずかに5％の有意水準に達した程度であった。

年次間変化の課程間差は，第1因子「有能性」では1年次から2年次にかけて5％水準，2年次から卒業時・3年次にかけて0.1％水準，第2因子「非親和性」では1年次から2年次にかけて0.1％水準，2年次から卒業時・3年次にかけて1％水準，そして第3因子「配慮性」では2年次から卒業時・3年次にかけてのみ1％水準の有意差が得られた。

医師イメージ3因子の年次間変化も，上述の看護婦イメージと同様，ポジティブな側面を意味する因子尺度得点（第1因子「有能性」，第3因子「配慮性」）は年次を経るにつれて得点の低下（ポジティブなイメージが弱まる方向への変化），ネガティブな側面を示す因子尺度得点（第2因子「非親和性」）は年次につれて得点の増加（ネガティブなイメージが強まる方向への変化）を示していた。ただし，第2因子「非親和性」の場合には先の「看護婦」イメージ因子と同様に1年次から2年次にかけての変化が顕著で，2年次以降の変化は鈍化しているが，第1因子「有能性」ではいずれの年次間の変化も同様に強く，第3因子「配慮性」ではむしろ2年次から卒業時・3年次にかけての変化の方がやや強いものであった。なお，年次間変化の課程間差は全般にかなり顕著であった。

（c）患者のイメージ

患者のイメージの因子尺度得点における年次間比較の結果は表9に示す。第1因子「心身の弱さ」では，1年次から2年次にかけて0.1％水準の有意な低下が認められる。2年次から卒業時・3年次にかけても得点の低下が示されているが有意水準には至っていない。第2因子「自己中心性」では，1年次から2年次にかけては全体での有意な変化は認められず，2年次から卒業時・3年次にかけての変化は1％水準での有意な低下であった。第3因子「しんの強さ」では，1年次から2年次にかけての変化も，2年次から卒業時・3年次にかけての変化もともに0.1％水準の有意な増加を示していた。ことに短大3年課程における変化はの大きさは顕著で（いずれの年次間の変化も0.1％水準で有意），1年次には7課程のうち最も低い得点であったものが3年次には最も高い得点に変化している。

年次間変化の程度の課程間での相違は全般に極めて強く，第2因子「心身の弱さ」の1年次から2年次にかけて1％水準の有意差であった以外，すべての因子，すべての年次間で0.1％水準の顕著な課程間差が得られた。特に第1因子「心身の弱さ」の2年次から卒業時・3年次の変化については，専：3年課程全日制（$p<.001$）や短大2年課程（$p<.05$）では得点低下が示されているが，4年制大学（$p<.001$）や専：2年定時制では得点の増加を示しており，課程間での変化の方向の相違が顕著であった。

以上，患者のイメージ3因子尺度得点の変化は，第1因子「心身の弱さ」では1年次から2年次にかけてのみ得点の減少（当該イメージが弱まる方向への変化）を，第2因子「自己中心性」では2年次から卒業時・3年次にかけてのみ得点の減少を示し，第3因子「しんの強さ」の場合にはいずれの年次間でも得点の増加（当該イメージが強まる方向への変化）を示すというものであった。これらの変化は，患者のイメージが，年次につれて良好なものへと変っていくことを示している。なお，年次間

での変化の程度における課程間の相違は極めて顕著であった。

（d）病院のイメージ

表10では病院のイメージ2因子における，年次間での変化を示している。第1因子「忌避性と陰欝さ」の場合，1年次から2年次にかけての変化は1％水準で有意な得点増加を示しているが，2年次から卒業時・3年次へかけての変化は有意ではなかった。第2因子「信頼性」では，1年次から2年次にかけての変化は0.1％水準，2年次から卒業時・3年次にかけての変化は1％水準でいずれも有意な得点減少を示している。

年次間変化の課程間での差は，第1因子「忌避性と陰欝さ」の1年次から2年次にかけてのみ1％水準で有意であり，他の年次，他の因子の場合には有意な課程間差は得られなかった。

病院のイメージにおける因子尺度得点の変化は，先の看護婦イメージ，医師イメージと同様に，ポジティブな側面を示す因子（第2因子「信頼性」）は年次を経るにつれて得点の低下（ポジティブなイメージが弱まる方向への変化），ネガティブな側面を示す因子（第1因子「忌避性と陰欝さ」）は年次を経るにつれて得点の増加（ネガティブなイメージが強まる方向への変化）を示すものであった。その変化の程度は，第1因子「忌避性と陰欝さ」，第2因子「信頼性」ともに1年次から2年次にかけての変化の方が2年次以降の変化よりも顕著であった。なお，年次間変化の課程間差は顕著ではなかった。

V．考　察

以上，本研究では，まず職業環境認知に関する4種のキー・コンセプトについてそれぞれ因子分析を行ない，新たに得られた卒業時・3年次調査データにおいても，1年次，2年次と同様の因子構造を得ることができた。

次に，各イメージの因子尺度得点を教育養成課程間で比較したところ，医師第1因子「有能性」の因子尺度得点は，年次を経るにしたがってその課程間較差を増大させていく傾向が読み取れた。また看護婦第3因子「『天使』性」にも類似の傾向があった。逆に病院第2因子「信頼性」は年次につれてこの較差を収束させていく傾向のあることもわかった。

医師の「有能性」因子尺度得点における較差の増大は，全般に年次を経るにしたがって低下する傾向のあるこの得点において，短大3年課程ようにほとんど低下を示さず，常に高い有能性認知を維持している課程が存在することによる。しかしこの課程がなぜ高得点を維持しているかについては明らかでない。一方，病院の「信頼性」因子尺度得点における較差の減少は，全課程の得点が低下傾向を示すなかで特に前年次に高い得点を示していた課程の低下が次の年次に著しく，また1年次に高得点ではなかったものの2年次に強い低下を示した短大2年課程においては，卒業時・3年次において揺り戻し現象を示しており，これらの動きが総合されて全般的な較差収束の傾向を示したものと思われる。

次に，看護学生の職業環境認知に関する各因子尺度得点の年次間での比較を行ない，「看護婦」，「医師」，「病院」の3種キー・コンセプトにおいて類似する変化傾向を明らかにした。それは，これらキー・コンセプトの各因子のうちポジティブな意味内容を有するものは年次を経るにつれて得点を低下させ，ネガティブな意味内容を有する因子は年次につれてその得点を上昇させている点である。すなわちこれは，看護学生の職業環境認知はより年次を経るにつれてよりネガティブな方向への変化を示していることを意味する。その変化のパターンは，医師第1因子「有能性」のように1年次から2年次にかけても，2年次から卒業時・3年次にかけても強い得点変化を示すもの，医師第3因子「配慮性」のように2年次から卒業時・3年次にかけての変化の方がやや強いものを除けば，他の因子はいずれも1年次から2年次にかけての変化が極端で，2年次以降の変化はやや鈍化，ないしは停滞するというものであった。

1年次から2年次にかけての変化を報告した前稿（若林他，1990）では，看護学生の職業環境認知がネガティブな方向に強く変化することを明らかにした。その後1年間の変化を継続的に追跡した本研究では，このような職業環境認知のネガティブな方向への変化が，2年次以降もやや鈍化，停滞しながらも概ね維持されることがわかった。なお，課程別に検討すれば，医師第2因子「非親和性」における専：2年課程全日制，医師第3因子「配慮性」における短大3年課程などにおいて，1年次から2年次にかけての変化と2年次以降の変化とでその方向が異なる，いわゆる「揺り戻し」の現象が観察されたが，このような変化はごく稀なものといえる。

一方，「患者」イメージは他の3種のイメージとは異なる特徴を示していた。第1因子「心身の弱さ」，第2因子「自己中心性」，第3因子「しんの強さ」はいずれも他のイメージ因子とは逆に，年次につれてポジティブな意味内容を強め，ネガティブな意味内容を弱める方向への変化を示している。すなわち「患者」のイメージは，年次につれてポジティブなものへと変容していっている。

看護職を取り巻く職業環境に対する看護学生の認知は，「患者」イメージを除き，年次につれてネガティブな方向への変化を示すものであった。そしてその変化

は，入学1年間（1年次から2年次までの期間）におけるものが顕著で，その後の変化は鈍化あるいは停滞傾向を示していた。このような職業環境認知の変化の動きは，一体何に起因するのであろうか。

まず第1に，看護学生が看護学校入学前に，看護に対して有していた認識が，極めて乏しく，かつ偏ったものであることが指摘できる。「白衣の天使」，「博愛」，「ナイチンゲール精神」など看護職を彩る美辞麗句は数多い。これらが看護職の一面を示すものであることは否定できるものではないが，その裏側にある別の一面に対する認識はあまりにも乏しい。最近になって，看護婦不足の問題の顕在化から，一般のマスコミ媒体でも看護職の労働条件の悪さ，社会的地位の低さなどが論じられるようになってきた。しかしそれ以前はこのような問題が一般に知られる機会は極めて乏しいものであった。看護職を志望する学生への進路指導においても，進路指導教員の看護職についての知識は一般認識の域を越えるものではなく，看護を志望する高校生に，看護職就業（看護学校進学）に先立って必要と思われる『正しい看護職のイメージ』を提供するには至っていない。

一方，第1の要因に相乗する形で作用する第2の要因として，看護学校に入学してからの教育が臨床現場と直結して行なわれることから，現実の看護職イメージが急速に形成されていくことが挙げられる。看護学校は病院付設として隣接敷地内に造られていることが多く，また病院付設でない場合も，1年生の頃から病院見学や実習を通して頻繁に病院へ出入するため，看護や医療の現場との接触の機会は極めて多い。さらに教員の大多数は現職の医師や看護婦，または過去に看護婦の経験を有する教員であり，医療現場や看護に関する多くの情報が講義等を通じて提供される。またある学生は，看護婦出身教員の人となりから，逆に看護職のイメージを形成していくかもしれない。

すなわち，看護学校入学前には看護職に関する知識が極めて乏しく，あるいは偏ったものであったのが，看護学校入学後，突然として看護職の現実の姿を突き付けられる。当然そこには看護職のネガティブな側面の情報も多く含まれており，看護学校入学まで抱いていた看護職の虚像は大きく破壊され，新たな現実的な看護婦イメージが形成されていく。それが，入学後1年間における職業イメージの急激な悪化として現れるのではないかと思われる。従ってこれらの現象は，職業観の『悪化』として捉えるよりも，むしろ入学前の誤った職業観が『適切に修正』されたものとして捉える方が正しいのかもしれない。

さらに今後の興味は，このような看護職についての職業観が，看護婦としての就職を機会にどのように変容するか，という点にある。縦断調査研究として計画されている本研究は，現在，調査対象看護学生の就職後の職業観，職業適応などに関する資料を漸次収集している段階にある。これらの新たな資料が，看護職のキャリア発達の全貌を次第に明らかにしていくものと思われる。

文　　献

藤原ヤスエ・進藤正代　1980　看護婦像に関する一調査　看護教育　**21**, 624-633.

石塚百合子・白佐俊憲・木村泰子・水谷一郎　1982　看護婦イメージの研究　看護教育　**23**, 446-453.

看護行動研究会（編）　1988　看護職キャリア発達研究：看護学生（1年次）の職業意識を中心に　名古屋大学教育学部産業心理学教室

看護行動研究会（編）　1990　看護職キャリア発達研究(2)：2年次における看護学生の意識と行動の変化　名古屋大学教育学部産業心理学教室

看護行動研究会（編）　1991　看護職キャリア発達研究(3)：入学後2年間の意識と行動の変化：3年次調査結果を中心に　名古屋大学教育学部産業心理学教室

厚生省健康政策局看護課（監修）　平成2年看護関係統計資料集　日本看護協会出版会

国本紘子・尾池みゆき・寺尾久美子　1988　SD法による看護学生の入学時における自己概念　大阪府立看護短大紀要　**10**, 25-33.

国本紘子・尾池みゆき・寺尾久美子　1989　第2看護学科学生の自己概念の変化：入学時から臨地実習終了時　大阪府立看護短大紀要　**11**, 27-32.

国本紘子・尾池みゆき・寺尾久美子　1990　第1看護学科学生の自己概念の変化：入学時から臨地実習終了時　大阪府立看護短大紀要　**12**, 25-30.

水野　智・大西幸子・服部美保子・若林　満　1988　看護学生の職業観測定のための予備的研究：「看護婦」，「医師」，「患者」，「病院」の各語から連想される形容詞の収集　経営行動科学　**3**, 41-50.

Osgood, C. E., Suci, G. J., & Tannenbaum, P. H., 1957 The measurement of meaning, Urbana Univ, Illinois Press.

謝花美佐子・平良広子・安里栄子・金城靖子・新田美恵子・上地悦子・砂川瑞枝・許田英子・我如古栄子・石川清治　1984　看護学生の看護婦イメージの学年別による検討：動機と意思との関連　看護教育　**25**, 89-94.

若林　満・佐野幸子・水野　智　1989　看護学生の職業環境の認知：看護婦・医師・患者・病院に対するイメージの分析を通じて　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）　**36**, 121-137.

若林　満・水野　智・佐野幸子　1990　看護職キャリア発達：看護学校入学１年後における職業環境認知の変化　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科）**37**, 31-50.

（1991年８月21日　受稿）

補表1　職業環境イメージ各因子尺度得点間の相互相関係数，および各因子尺度得点の信頼性係数 (1)

		1年次調査										
		看護婦のイメージ			医師のイメージ			患者のイメージ			病院のイメージ	
		有能性と健康性	陰険性	「天使」性	有能性	非親和性	配慮性	心身の弱さ	自己中心性	しんの強さ	忌避性と陰欝さ	信頼性
1年次	看護婦 1. 有能性と健康性	(.847)										
	看護婦 2. 陰険性	−.053	(.752)									
	看護婦 3. 『天使』性	.465**	−.019	(.772)								
	医師 1. 有能性	.467**	.085*	.299**	(.760)							
	医師 2. 非親和性	−.132**	.399**	.037	−.154**	(.776)						
	医師 3. 配慮性	.339**	−.103*	.289**	.452**	−.418**	(.843)					
	患者 1. 心身の弱さ	.279**	.210**	.252**	.382**	.158**	.121**	(.869)				
	患者 2. 自己中心性	−.076*	.298**	.062	−.024	.380**	−.134**	.351**	(.814)			
	患者 3. しんの強さ	.256**	.037	.296**	.248**	.003	.350**	.206**	−.048	(.585)		
	病院 1. 忌避性と陰欝さ	−.070*	.333**	.024	−.018	.426**	−.162**	.283**	.334**	.016	(.878)	
	病院 2. 信頼性	.422**	−.055	.262**	.455**	−.160**	.324**	.332**	−.039	.300**	−.159**	(.793)
2年次	看護婦 1. 有能性と健康性	.540**	−.051	.287**	.344**	−.112*	.286**	.216**	−.063	.199**	−.090*	.324**
	看護婦 2. 陰険性	−.106*	.508**	−.036	.025	.317**	−.123**	.186**	.304**	.038	.318**	−.045
	看護婦 3. 『天使』性	.316**	−.041	.567**	.250**	.028	.261**	.234**	.066	.212**	.009	.212**
	医師 1. 有能性	.360**	.050	.228**	.554**	−.124**	.280**	.253**	−.106*	.212**	−.025	.336**
	医師 2. 非親和性	.002	.256**	.052	−.070*	.526**	−.234**	.139**	.252**	.016	.328**	−.043
	医師 3. 配慮性	.260**	−.053	.243**	.277**	−.199**	.462**	.097*	−.089*	.254**	−.105*	.253**
	患者 1. 心身の弱さ	.167**	.138**	.157**	.253**	.105*	.067	.515**	.139**	.107*	.208**	.240**
	患者 2. 自己中心性	.012	.247**	.083*	−.014	.314**	−.073*	.180**	.526**	−.049	.234**	−.003
	患者 3. しんの強さ	.170**	−.046	.229**	.213	−.111*	.300**	.123**	−.088*	.418**	−.046	.238**
	病院 1. 忌避性と陰欝さ	−.006	.230**	.062	.008	.278**	−.041	.229**	.207**	.056	.551**	−.105**
	病院 2. 信頼性	.283**	−.078*	.174**	.307**	−.109*	.226**	.128**	−.123**	.157**	−.128**	.522**
卒業時・3年次	看護婦 1. 有能性と健康性	.520**	−.093*	.249**	.331**	−.044	.238**	.184**	−.049	.206**	−.064	.326**
	看護婦 2. 陰険性	−.139**	.402**	−.004	−.008	.266**	−.131**	.130**	.237**	−.039	.317	−.053
	看護婦 3. 『天使』性	.271**	−.006	.518**	.212**	.080*	.194**	.164**	.088*	.223**	.059	.161**
	医師 1. 有能性	.268**	.022	.213**	.480**	−.103*	.248**	.222**	−.045	.138**	.011	.252**
	医師 2. 非親和性	.002	.170**	.069*	−.053	.459**	−.179**	.086*	.258**	.022	.261**	−.046
	医師 3. 配慮性	.176**	.032	.242**	.289**	−.150**	.395**	.122**	−.064	.223**	−.009	.168**
	患者 1. 心身の弱さ	.214**	.151**	.130**	.245**	.126**	.081*	.467**	.164**	.108*	.223**	.195**
	患者 2. 自己中心性	−.014	.221**	.079*	−.052	.298**	−.059	.127**	.473**	−.061	.249**	−.026
	患者 3. しんの強さ	.141**	.067	.187**	.170**	−.012	.232**	.159**	−.022	.391**	.061	.195**
	病院 1. 忌避性と陰欝さ	−.038	.244**	.118**	.003	.318**	−.056	.229**	.224**	.042	.546**	−.072*
	病院 2. 信頼性	.253**	−.032	.219**	.285**	.017	.177**	.158**	−.022	.147**	−.069*	.464**

N＝814

対角要素に示した（　）内の数字は信頼性係数（α）

補表1　職業環境イメージ全因子尺度得点間の相互相関係数，および因子尺度得点の信頼性係数 (2)

		2年次調査										
		看護婦のイメージ			医師のイメージ			患者のイメージ			病院のイメージ	
		有能性と健康性	陰険性	「天使」性	有能性	非親和性	配慮性	心身の弱さ	自己中心性	しんの強さ	忌避性と陰欝さ	信頼性
2年次	看護婦 1. 有能性と健康性	(.852)										
	看護婦 2. 陰険性	−.039	(.792)									
	看護婦 3. 『天使』性	.476**	−.102**	(.757)								
	医師 1. 有能性	.520**	.083*	.322**	(.764)							
	医師 2. 非親和性	.006	.398**	.043	−.024	(.762)						
	医師 3. 配慮性	.407**	−.084*	.390**	.489**	−.272**	(.842)					
	患者 1. 心身の弱さ	.302**	.190**	.287**	.365**	.178**	.154**	(.847)				
	患者 2. 自己中心性	.038	.365**	.106**	−.004	.435**	−.035	.257**	(.803)			
	患者 3. しんの強さ	.283**	.002	.311**	.286**	.001	.377**	.205**	−.098**	(.633)		
	病院 1. 忌避性と陰欝さ	.002	.421**	.046	.052	.410**	−.053	.330**	.361**	.051	(.884)	
	病院 2. 信頼性	.413**	−.102**	.281**	.474**	−.111**	.364**	.260**	−.020	.195**	−.142**	(.779)
卒業時・3年次	看護婦 1. 有能性と健康性	.580**	−.137**	.298**	.385**	.027	.290**	.209**	−.025	.178**	−.021	.358**
	看護婦 2. 陰険性	−.114**	.555**	−.091**	.020	.290**	−.116**	.145**	.240**	−.050	.282**	−.083*
	看護婦 3. 『天使』性	.306**	−.071*	.629**	.243**	.070*	.265**	.185**	.070*	.227**	.033	.211**
	医師 1. 有能性	.327**	−.004	.239**	.589**	−.097**	.326**	.284**	−.061	.217**	.008	.319**
	医師 2. 非親和性	−.014	.312**	.024	−.055	.611**	−.196**	.117**	.344**	−.047	.320**	−.023
	医師 3. 配慮性	.267**	−.063	.327**	.363**	−.188**	.493**	.184**	−.059	.306**	−.004	.226**
	患者 1. 心身の弱さ	.234**	.162**	.206**	.278**	.178**	.134**	.609**	.195**	.128**	.258**	.184**
	患者 2. 自己中心性	.016	.253**	.102**	−.049	.360**	−.070*	.184**	.600**	−.069*	.257**	−.010
	患者 3. しんの強さ	.197**	.075*	.186**	.232**	.006	.258**	.160**	−.057	.528**	.119**	.160**
	病院 1. 忌避性と陰欝さ	−.041	.331**	.062	−.002	.381**	−.069*	.287**	.245**	.059	.622**	−.104**
	病院 2. 信頼性	.293**	−.070*	.244**	.342**	−.016	.268**	.226**	.012	.168**	−.140**	.571**

		卒業時・3年次調査										
		看護婦のイメージ			医師のイメージ			患者のイメージ			病院のイメージ	
		有能性と健康性	陰険性	「天使」性	有能性	非親和性	配慮性	心身の弱さ	自己中心性	しんの強さ	忌避性と陰欝さ	信頼性
卒業時・3年次	看護婦 1. 有能性と健康性	(.853)										
	看護婦 2. 陰険性	−.101**	(.778)									
	看護婦 3. 『天使』性	.432**	−.027	(.783)								
	医師 1. 有能性	.453**	.033	.312**	(.782)							
	医師 2. 非親和性	.054	.377**	.079*	−.104**	(.754)						
	医師 3. 配慮性	.307**	−.051	.371**	.529**	−.243**	(.813)					
	患者 1. 心身の弱さ	.282**	.194**	.242**	.336**	.168**	.186**	(.852)				
	患者 2. 自己中心性	.005	.342**	.131**	−.075*	.426**	−.051	.309**	(.823)			
	患者 3. しんの強さ	.188**	.054	.252**	.226**	−.036	.339**	.234**	−.022	(.682)		
	病院 1. 忌避性と陰欝さ	−.019	.415**	.082*	.029	.409**	.001	.361**	.326**	.076*	(.886)	
	病院 2. 信頼性	.423**	−.012	.373**	.422**	−.012	.320**	.310**	.008	.247**	−.063	(.779)

ABSTRACT

Development of Nurse Career(2): Changes of Perceived Occupational Environment among Nurse Students in Two Years after Starting the Nurse College.

Mitsuru WAKABAYASHI, Satoshi MIZUNO, and Sachiko SANO

This article describes changes of perceived occupational environment in initial two years of a ten-year planned longitudinal study which is designed to explore developmental process of nurse career.

To 894 nurse students who were enrolled in 7 different nursing education courses in 1988, questionnairs were administered during May-June of 1988 for a first year survey, during April-May of 1989 for the second, and during April-June of 1990 for the third. An available data size was 814 over time. Main findings are summarized as follows;

Factor analyses on image scales of 4 key concepts (Nurse, Doctor, Patient, and Hospital) identified the congruent factor structures among the first, second, and third year survey.

A series of factor-scale scores followed by the results of factor analyses were compared among different training programs and among different periods. The result was that the image scores of Nurse, Doctor, and Patient changed toward a negative direction with the passage of time, and a degree of the changes between the first and second year was larger than those between the second and third year that were found to be very small or negligible. The image scale scores of Patient changed positively with the passage of time.

Finaly, a cause of changes in the perceived occupational environment was discussed,focusing upon the effect of the passage of time.